

# SHOW HEYシネマルーム

★★★

エリン・ブロコビッチ

2000 (平成12) 年5月30日鑑賞

Data

監督: スティーブン・ソダーバーグ  
出演: ジュリア・ロバーツ/アルバート・フィニー/アーロン・エッカート/マージ・ヘルゲンバーガー

## 👁️👁️ みどころ

ジュリア・ロバーツの魅力に脱帽。そしてアメリカの公害訴訟の大変さもい  
い勉強に。それにしても350億の賠償金はすごい！

### <ジュリア・ロバーツという女優>

この映画は、一方では、単なるスケベおやじとしてジュリア・ロバーツの魅力を堪能し、他方では、弁護士としてアメリカにおける公害（調停）事件（損害賠償請求事件）のシステムをたっぷり勉強することができた、一挙両得の作品だ。

この映画の一つの話題は、ジュリア・ロバーツの魅力。しかも、その胸（の大きさ）の魅力。あの1990（平成2）年の「プリティー・ウーマン」で大ブレイクした、ジュリア・ロバーツの本来の魅力は、スリムな身体と大きな口。そして何といても、その華やかさ。決してボインではない。しかし、この映画で演じるエリン・ブロコビッチは、離婚歴2回、3人の子持ち、無学、無職、預金残高16ドル、自慢できるものは「ボイン」だけ、というケツタイな役柄だ。

エリンは車を運転中、信号無視の車にぶつけられる。そして損害賠償金をとるため、弁護士のエド・マスリー（アルバート・フィニー）に依頼する。しかし「無学」な彼女は、法廷での態度も悪く、言い方にも品がなく、陪審員から嫌われる。従って、依頼を受けた弁護士もてあまし気味。

結局、賠償金はとれなかった。困った彼女は、エド弁護士法律事務所へ押し掛けて、事務員として雇うよう迫り、弁護士はやむなく安月給でエリンを雇う。彼女は勇んで出勤してくるが、その服装たるや、「ボディコン」を通りこして、自慢の「ポイン」をひけらかすだけのもの。およそ、弁護士事務所には不釣り合いなことおびただしいものだった。

変な依頼者の事件を引き受けたら、弁護士も苦労するよ・・・という典型例。

## <アメリカにおける公害訴訟>

ところが、これからがこの映画の実質的なスタート。

「ファイルの整理」という「窓際族」的な仕事をしていたエリンは、あるファイルから、ロサンゼルス郊外のヒンクリーという、大会社のP社でもっているような小さな町で、多くの住民が体調を崩している事実をつきとめた。そして、これは工場から排出される6価クロムによるものだという仮説を、エリンは持ち前の行動力と執念で裏付けていく。この活動には、エリンにぞっこんの、友人兼恋人として登場するジョージ（アーロン・エッカート）も大きく貢献する。

エリンは、住民に対して訴訟提起を説得。また、大企業相手ということで腰が引けているエド弁護士にもハッパをかける。そして原告634名という大訴訟団を結成し、最終的に、3億3300万ドル（約350億円）という、賠償金（和解金）を勝ちとるのである。

しがたない零細事務所の弁護士であったエド・マスリーも、今や新しい立派な事務所に移転し、エリンはエド弁護士から破格のボーナスを獲得する。

最後はこのようにハッピーエンドとなり、笑いがこみあげてくるが、実は、この公害訴訟（調停）を提起することができたのは、現実に住民の中に入って、住民と同じ視線で公害調停を真剣に考えるエリンの姿勢を、住民たちが信頼したからである。この、エリンに対する住民からの信頼と尊敬があり、さらにエリンの身体を張った調査活動や証拠収集活動があったからこそ、エド・マスリー弁護士の訴訟活動も陽の目をみたのである。

## <巨額の賠償金>

公害事件を提訴することの大変さは、私も大阪国際空港騒音訴訟、西淀川大気汚染訴訟などで、身をもって体験しているだけに、いろいろな場面で共鳴しながら、このエリンとエドの訴訟活動を見ることができた。

それにしても、350億円はすごい。アメリカでも史上最高額の和解金とのこと。そして、エリンとエドは、現在も7件の訴訟を手がけているとのことである。念のためつけ加えれば、この映画はすべて実話である。

エリンの「ポイン」の魅力と、公害訴訟の、つらいけれども結果が報われたときのうれしさの醍醐味の両方を感じることができた秀作であった。

2001 (平成13) 年9月記